王朝人の美意識

追風用意

福田政義

Ⅰ袖口用意・装束用意・姿用意

王朝人は、「用意」を大切な教養の一つとしていた。「不用意」は非難の対象とされた。

用意と反応　用意とは「意ヲ用ヰルコト」であり、他者への配慮、心配りである。

と、同時に、他者の「用意」を感得し、鋭敏に反応する精神の働きでもある。

過度な用意は、おぞましい自己顕示ともとられ、批判、苦笑の種となり、人間関係を稀薄なものにする危険もあるが、万事、優雅な王朝人は、武家社会におけるような、他を威圧するデモンストラティブな「用意」にはしることはなかった。

また、位袍の制にみられるように、階級意識の強かった当時は、住む世界の異なった人びとの「不用意」は、不用意と眉をひそめながらも、致し方ないことと許容していたようである。

またなく乱がはしき隣の用意なさを、いかなることとも　聞き知りたるさまならねば、なかなか恥ぢかがやかむよりは　罪ゆるされてぞ見えける。（夕顔）

この上もなく騒々しい。隣近所のたしなみのない有様をも、別段どういうこととも、夕顔が気にかけていないようすなので、なまじいに恥しがって顔を赤くするよりは、かえって罪がないように思われる。

夕顔の宿の、暁方近くである。

まわり近所の迷惑も考えないで、雑音、騒音を立てる「用意なさ」は、庶民生活の、逞しい、それこそ「お互いさま」の神経の太さなのである。本来、源氏や夕顔の住む世界ではない。

彼女はおっとりと構えて、別段気にかけている様子がない。なまじ顔を赤くして、恥じ居るよりは罪がないと、源氏は見ている。

常陸宮の君（未摘花）の場合は、源氏のせっかくの「用意」に対して、「ただおほどかに」―おっとりして、反応を示さない。

彼女自身、懸想人が訪れて来るというのに「正身は　何の心げさうもなく」（御本人は別段、何の心づくろい―用意―もなさらない）で、いらっしゃる。

彼女なりの「用意」は、筆跡にしろ、贈答の歌にしろ、すべて古風にすぎて「不用意」と同様で、物笑いの種となる。

荒れはてた邸宅に住む姫君を訪れるのに、はなやかな用意は、かえって迷惑をかけると思い「うち忍び用意」なさったが、その配慮に反応する細やかな神経は持ち合わせていなかった。

手引きをした命婦は、源氏に対して、申し訳なく、気の毒に思うのだが、一方、姫君の「おほどかに　ものし給ふ」様子から、あまりボロを出すこともあるまいと安堵する。

男はいとつきせぬ御様を、うち忍び用意したまへる御けはひ　いみじうなまめきて、見知らむ人にこそ見せめ、何の映あるまじきわたりを、あないとほしと　命婦は思へど、ただ　おほどかに　ものし給ふをぞ、うしろ安う、さし過ぎたることは　見え奉り給はじと思ひける。（末摘花）

男（源氏の君）は、実に限りなく美しい御容姿であるのを、目立たないようにとりつくろっていらっしゃる。その御様子は、実に優美で、ものの風情を解する人に見せれば、さぞ見ばえもしようが、少しの見ばえもしそうに思われないこんな所では、源氏の君に対して、まあお気の毒なことだと、命婦は思うのであるが、それでも、姫君が、ただおっとりとしておられるのが気安く、これなら余計な欠点は、お見せになるまいと思った。

幼き恋の　　祖母大宮の膝許で芽生えた、夕霧と雲居雁の従姉弟

不用意　　同士の「幼き恋」は、

―落ち散る恋文

まだ片生なる手の　生先美しきにて　書きかはし給へる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折もあるを　御方の人は　ほのぼの知れるもありけれど（乙女）

まだ人なみに上達しない幼稚な、しかし、将来はさぞ立派になられるだろうと思われる可愛い筆跡で、お互いに書きかわされた手紙などが、子供心の不用意からうっかり落ち散らしてあるのを見つけて、雲居雁のお付きの女房の中には、うすうす二人の仲に気づいているものもあったが、

女房たちの噂話となり、その「しりう言」（陰口）を、雲居雁の父、内大臣が聞いて、母の大宮に恨み言をいう。

大宮は思いがけないことで「御目も大きになりぬ」お目を見張られ、びっくりなさるのであるが

宮はいといとほしと思す中にも、男君の御愛しさは、すぐれ給ふにやあらむ　かかる心のありけるも　うつくしう思さるる

大宮は、お孫たちを誰もだれもいとしくお思いになる中にも、特に夕霧のお可愛さがまさっていらっしゃるせいでもあろうか。夕霧に、

このような恋心のあったことまでが可愛らしくお思いになる。

夕霧が挨拶に来た時、大宮はそれとなく注意をするが、「よし今よりだに用意し給へ。とばかりにて、ことごとに言ひなし給ひつ。」（まあまあよろしい。せめてこれから後はよくお気をつけなさいとだけ言って、話をほかの事にそらしておしまいになった。）

恋文にこそ　幼き者同士、書き交わした恋文は、不用意に落ち散
深き用意を　っても、幼き故にゆるされる。

しかし、大人の恋の、しかも不倫の仲の恋文は、「深き用意」が、お互いのため　必要である。それが難しいと源氏は嘆く。

人の深き用意は難きわざなりけりと、かの人の心さへ見貶（みおと）し給ひつ。（若菜下）

（この手紙から推して）人が深い心づかいをするのは、容易ならぬことであったと、（不用意な）柏木の心がけさえ、見さげておしまいになった。

恋文は、余程細心に、注意して書くべきで「いと　かく　さやかには　書くべしや」（情事を、こんなに、はっきりと書くということがあるものか）

「文をこそ　思ひやりなく　書きけれ」（よくもこんな手紙を、あと先も考えずに書いたものだ）

「おち散ることもこそと思ひしかば」（落ち散り人目にふれることも、あると考えたなら）

「ことそぎ　書き紛らはししか」（昔、自分などは、あぶなっかしい個所は、他人には分からないように、省略して、ぼんやりと、まぎらかして書いたものだ）

柏木の不用意な恋文の書き方と、女三宮の、こうした人目に触れたら一大事となる手紙の処理の不用意さを嘆く源氏であった。

不用意ゆえに、男は罪の意識に悩み、死に、女は出家入道という悲運に追いこまれる。

用意と　女三宮の不用意にふれ、源氏の息子の夕霧も彼女を思い貶
愛情と　すのであった。そして宮に対する父の愛情の薄い理由に思
いあたるのであった。

なほ内外（うちと）の用意多からず、いはけなきは　らうたきやうなれど、うしろめたきやうなりやと思いおとさる。（若菜上）

やはり、内外すべての事につけて、注意が行き届かず、子供らしいのは、可愛らしいようではあるが、不安な気がすることだと、夕霧は女三宮を軽く思われる。

六条院の春。桜花の下で、君達（きんだち）の蹴鞠（けまり）を婦人方が見物した時のことである。夕霧は、女三宮方（がた）と紫の上がたと比較する。

いと端近なりつる有様を、かつは軽々しと思ふらんかし

女三宮がたがあまりにも端近におられた態度は、姫宮らしくなく、軽々しいことと思うだろう。

いでやこなたの御有様の　さはあるまじかめると思ふに

紫上の御態度には、あのような軽々しいことは、恐らく絶対にあるまいと考えると

かかればこそ　世の覚えの程よりは　内内の御志ぬるきやうにはありけれと思ひ合せて（若菜上）

こういう違いがあるから、女三宮に対して、世間で思っているよりは、父源氏の、実際の御愛情が薄いこととなるのであったと、思いあたる。

源氏は、折にふれて女三宮に「用意」のことをお教えになる。

朱雀院の御賀の時、父の院にお会いになる時の用意を女三宮に教えられるが、宮は御年「廿一、二ばかり」におなりになるのであるが、依然として幼く、可愛らしくはあるが、心の成長がのぞまれるのである。

院にも見え奉り給はで、年経ぬるを、ねびまさり給ひにけりと　御覧ずばかり用意くはへて　見え奉り給へと、ことにふれて教へきこえ給ふ。（若菜下）

あなたは十四歳の時、この六条院に参られ、二十歳を過ぎられた今日まで、父院にもお会いにならないで、長い年月が経ったのですから、その間、ずい分大人におなりになったものだと、父院が御覧になるほど、よくよく気をつけられてお会いになさいませと、何かにつけてお教えになる。

袖口　オシャレ意識である

用意　袖口に対する用意は女性専門の配慮である。

殿舎の御簾や、物見車、桟敷の御簾の下からのぞく袖口の、部分の美が、全体の衣裳を、衣裳につつまれた美しい姿、容貌を想像させ、見る人の心をときめかせるのである。

その僅かにのぞき見る袖口の部分にこそ、「用意」がうかがわれ、それによって人柄の多少の推量もなされ、また貴婦人を中心とした女房たちのグループの袖口には、何となく家風といったものが感得されるのである。

三月の廿余日、源氏は右大臣の邸宅に招待される。藤の花見の宴である。右大臣家は、「花々と　ものし給ふ殿のやうにて、何事も今めかしうもてなし給へり。」

はで好みでいらっしゃるというのが、この殿（右大臣家）の家風で、万事、当世風（現代的）におやりになる。

この家風が、姫君たちや、仕える女房たちの袖口用意として出てくるのである。

袖口など踏歌のをり覚えて　ことさらめきもて出でたるを　ふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる（花宴）

袖口など、踏歌の節会を思わせるような、いかにも、わざとらしい風に御簾の下から、押し出しにしているのを見て、こんな内宴に似合わしくないと、源氏はすぐに、奥ゆかしい藤壺のあたりの袖口用意を思い出される。※押出し（袖口だけを出す）、打出（袖口と裾を打ち出す）

さらに「空薫物」は煙ったいほどに漂い、女房たちの、立ち居振舞いの「衣の音なひ」―衣ずれの音も「いとはなやかで」、総じて、奥ゆかしい風情に欠けているのが、この邸宅の雰囲気である。

わざとらしい、行き過ぎた袖口用意は、その袖口からの薫香の、追風用意も、文字通り、鼻もちならぬ状態であったろうと思われる。

踏歌節会は正月十六日、豊楽院で、京中の女の歌舞に巧みなるを召し集えて、年始の祝辞を作りて、舞踏せしめ、後、酒宴となる。あられはしりとも云う。これは女踏歌の解説で、始めは十五日に男踏歌があったが、円融帝の天元以後、時に行われるだけで、十六日の女踏歌が、年毎の儀となった。末摘花巻に「今年男踏歌あるべければ…」とあるのは、時に行われることを物語っている。

踏歌の時の婦人方の袖口用意については、真木柱巻に次の様に描かれている。男踏歌の時のことである。

踏歌は方々に　里人参る。様異に賑はしき見物なれば　誰も誰も清らをつくし袖口かさなり　こちたく整えたまふ。

踏歌の見物には、こうした方々のお局に、お里の女房たちも参上する。様子のかわった、にぎやかな見物であるから、だれもかれも皆、美しく着飾って、袖口のかさねなども何枚となく大層にお整えになる。

この御局の袖口、大方のけはひ　今めかしう　同じものの　色あひかさなりなれど、物よりことに花やかなり

このかんの君（玉鬘）の御局の女房たちの袖口や、あたり全体の様子が当世風で、よその女房たちと同じものの色あいや、かさね（襲）であるけれど、一段ときわ立って花やかである。

玉鬘の、山吹の花に譬えられた、明るい性格が、傍の女房たちの袖口用意に反映しているのである。ことに踏歌の折である。ふだんより、一層花やかに、袖口に配慮されたのである。

御禊の日の袖口用意。

葵祭はファッション・ショーである。

男踏歌は、女踏歌、御賀、内宴　などの折のはなやかな袖口は、まあまあ許され、そのほか、葵祭、その前の斎院の御禊の日など、いわゆる「晴」の日の袖口用意は、供奉の上達部の「染装束」に劣らず、見物の人々の目を楽しませるものであった。

御禊の日……かねてより、物見車こころづかひしける…一条の大路…ところどころの御桟敷、心ごころに、しつくしたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物なり。（葵）

御禊の日。…前々から貴婦人や女房たちの物見車も、その装束に心を配っているのであった。…行列の道筋の一条大路も（混雑していて）…所々の御桟敷の心々に工夫を凝らしたしつらい、婦人たちの袖口さへ、すばらしい見物である。

若き女房たちの袖口用意は、恐らく、はでを競ったものであったろうが、相応の身分、年輩の方々の袖口には、それなりの気品、たしなみがただよっていたと思われる。

前の東宮妃、六条御息所の物見車の袖口がそのよい例である。

網代の少しなれたるが、下簾のさまなど、よしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫　など、ものの色　いと清らにて、殊更に　やつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり（葵）

網代車で、少し古びているが、下簾の様子などは趣のあるもので、大層控え目なようすで、ちょっと簾の下からこぼれ出た（女房の）袖口や裳の裾や、汗衫（童女の上着）など、その色合が誠に美しくて、わざと忍び姿をして、その身分をつつんでおられるものと、はっきり知られる物見車が二台あった。

・浮世の外の袖口にも「用意」。

八省に立て続けたる出車どもの袖口　色あひも　目慣れぬさまに心にくき　けしきなれば…（賢木）

斎宮のお別れの儀式のあった八省院（正殿は大極殿）のあたりに立て並べた、お供の女房たちの盛装した車の、下簾から、こぼれ出た袖口などの色合も、見馴れない、変った様子であるが、それなりに、奥ゆかしい様子なので―。

齋宮（六条御息所の姫宮。後の秋好中宮）が帝にお別れの挨拶をして、宮中から退出するのを待っている車からの袖口である。

伊勢神宮に仕える斎宮の御供の衣裳は、一般とは違った、目馴れぬものであったが、それなりの「袖口用意」に、奥ゆかしさを感じさせるものがあったと言うのである。

仏に仕える住居にのぞかれる袖口もまた、一般のものとは違った用意がなされる。

様かはれる御住居に、御簾の端、御几帳も、青鈍にて　ひまひまより　ほの見えたる薄鈍。山梔子の袖口など　なかなかなまめかしう

おくゆかしう　思ひやられ給ふ。（賢木）

藤壺入道の宮の、様子のかわった御生活で、御簾のふちどりも、御几帳の垂れ布も、青鈍色で、隙き間から、ほのかに見える薄鈍色、くちなし色の袖口など、もの寂しい色合いであるが、それがまた、かえって優美で、奥ゆかしく思いやられ給うのであった。

年の暮の御衣見立で、源氏が「空蟬の尼君」には「青鈍の織物、いと心ばせあるを　見つけ給ひて、御料にある　山梔子の御衣　ゆるし色なる添へたまひ」（青鈍色の織物で、いかにも雅趣の深いのをお見つけになって、それに源氏自身のお召料の中から、くちなし色の御衣と、ゆるし色（薄紅）のとを添えられ）お贈りになる。

年改って、初春に、源氏は御方々を訪れる。

空蟬の尼衣にも　さし覗き給へり。……

袖口ばかりぞ　色異なるしも　懐しければ…（初音）

袖口のところだけが、青鈍色ではなくて、少し花やかな色がわりのものであるのが、殊になつかしい感じがするので（源氏の君は、涙ぐむ）

青鈍の織物、山梔子いろの御衣　などが、仏に仕える者に　ふさわしいのであろうが、それは　また「様異なる用意」となる。

姿用意　「童六人、赤色に桜襲の汗衫袙は紅に藤襲の織物なり。姿用意などなべてならず見ゆ。」（絵合）

装束用意

御さま用意

童は女童である。天徳歌合の時「童女四人文台ヲ舁グ」とあり、汗衫「童女のうへに着る物也」と古註にある。

主上の御前で絵合が行われた。

童女六人は、絵合の雑役を勤めるもので、これは左方の童の「姿用意」である。右方の童は「青色に柳の汗衫、山吹がさねの袙着たり」となっている。

「姿用意」を「姿や心用意」と解しているものもあるが、「姿・用意」ではなく、「姿に対する心くばり」のようである

二月の二十余日、朱雀院に行幸あり。……

院にも御用意ことにつくろひ磨かせ給ひ…人々の装束用意常よりことなり。院もいと清らかに　ねびまさらせ給ひて、御さま用意なめきたる方にすすませ給へり。（乙女）

冷泉帝が、前帝朱雀院へ行幸なさる。

「院にも御用意ことに」とは、朱雀院が行幸をお迎えするための万事にわたる「御用意」であるが、院の「御さまの用意」は「御容姿に対するお心づかい」で、人々の「装束用意」が「装束に対する用意」と同様に解すべきであろう。

写本などに「さうぞくよういい」「御さまよういい」とあり、「装束・用

意」「御さま・用意」といった気持で読み下すところでない。

楽の方の　音楽、舞踏方面についての「用意」である。単なる配慮
用意　　ではなく、具体的に、楽器しらべ、演奏時の装束などに
　　ついての「用意」である。

御簾の下より、箏の御琴のすそ　少しさし出でて「かるがるしきやうなれど、これが緒　ととのへて　調べ　こころみ給へ。……」と、のたまへば　うち畏りて　たまはり給ふ程　用意おほく　めやすくて、一越調の声に発の緒を立てて……（若菜下）

源氏の君が御簾の下から箏の琴の端を少しお出しになって「ぶしつけなようですが、この琴の絃をしめて　調子を試して下さい…」と仰しゃる。夕霧がつつしんでその琴をお受けとりになる時の様子は心づかいの行き届いた、ほどよい感じで基準となる調子の絃を一越調にととのえられた

ここの「用意」の「めやすさ」も、音楽の素養が深く、自信が背後にあるからである。

楽の方のことは　御心とどめて、いとかしこく知りととのへ給へる…

音楽方面のことには、特にご熱心で、非常に堪能で精通していらっしゃる。

朱雀院の五十の御賀の準備の折、院は音楽に堪能でいらっしゃるから、きめ細やかな「用意」が必要である。

柏木衛門督は「楽所の試みの日」に、源氏の君からお召しがあって六条院に参上する。源氏は柏木を御簾の内に入れて、楽の方の「用意」を懇願する。

かの大将ともろともに見入れて、舞の童の用意、心ばへ　よく加へ給へ。物の師などいふものは　ただ　わが立てたることこそあれいとくちをしきものなり。（若菜下）

あの夕霧大将と一緒に、世話をやいて、舞をする子供たちの装束や、心構えについて、よく注意を加えて下さい。専門の楽師などというものは、自分の職業としている芸が上手なだけで、全般的な用意（配慮）が足りないようで残念なことです。

六条院での、こうした装束用意などは、夕霧大将の養い親で、家庭的な夏の御方、花散里のいらっしゃる「東の御殿」でなさる。もちろん花散里が中心で、女房たちがお手伝い申し上げる。

東の御殿にて、大将のつくろひ出し給ふ楽人　舞人の装束の事などまたまた行ひ加へ給ふ。あるべき限　いみじく尽し給へるに、いと委しき心しらひ添ふも、げにこの道は　いと深き人にぞ　ものし給ふめる。（若菜下）

東の御殿で、夕霧大将のお整えになっていらっしゃる、楽人、舞人の装束用意のことなど、柏木がいろいろ助言なさったので、それによって、またまた新しい趣向をお加えになる。

すでに夕霧が出来るかぎり十分の工夫を凝らしてととのえられたものであるのに、柏木がさらにまたなお一層行き届いた意匠を付け加えられる。それを見ても、ほんとに柏木はこの道にかけて深い造詣を持っておられるようである。

病床の用意　「重く煩ひたる人は　自ら髪髭も乱れ　物むずかし

老境の用意　きけはひも添ふわざなるを」（柏木）

重い病気にかかっている人というものは、自然に髪や髭なども乱れ来て、何となく　むさくるしい様子になってくるものであるが

白き衣どものなつかしう　なよよかなるを数多かさねて、衾ひきかけて臥し給へる。御座のあたり　物清げに　けはひ　かうばしう心憎く住みなし給へる。うちとけながら　用意ありと見ゆ。（柏木）

柏木衛門督は、白い着物で感じのよいやわらかなものをたくさん重ね着にして、夜具をかけて臥しておられた。御病床のあたりはきれいに整頓されており、薫物の香がどこからともなく漂って来て、奥ゆかしくお住みになっていらっしゃる。病床にくつろぎなから、むさ苦しくなく、深いたしなみのある方と思われる。

夕霧が親友柏木の病床を見舞った時のことである。病室にはそこはかとなく薫物の香が漂い、「白き衣」「御座のあたり物清げに」の清潔感に「病床の用意」がうかがわれる。

帚木巻の、雨夜の女の品定めに登場する、藤式部の学者妻の「月頃風病重きにたへかねて、極熱の草薬を服して、いとくさきによりなむ、え対面たまはらぬ。」「実にそのにほひさへ花やかにたち添へるもすべなくて、にげめをつかひて」といった、薫香ならぬ、蒜（にんにく）の煎薬の香にたつ、すさまじい病室とは違い、さわやかな病室の雰囲気である。

だが、女三宮との密通で、源氏の目を恐れる柏木は、間もなく、「泡の消え入るように」世を去る。

夕霧は柏木の父、致仕の大殿（前の太政大臣・若き日の源氏のライバル頭中将）に、お悔みに参上する。

かつて、雲居雁との「御諸恋」を隔てた岳父であったが、長男の柏木を失って、悲歎にくれる無残な姿を発見する。

大臣の御出居のかたに入り給へり。ためらひて対面し給へり。古がたう清げなる御容貌いたう痩せ衰へて、御髭などもとりつくろひ給はねばしげりて、親の孝よりも　げにやつれ給へり（柏木）

大臣の表座敷の方にお入りになる。大臣は悲しみに沈んだ気持を直して、夕霧にお会いになる。この大臣は、いつまでも年をとらない、きれいな御器量であるのが、息子の死で、ひどく痩せ衰えて、お髭な

ども手入れなさらず、ぼうぼうと生えて、親の喪に服するよりも、なお一層やつれておられた。

「例は心強う鮮明に、誇かなる御気色　名残なく」消え失せ、身嗜みのよい大臣であるが、悲しみの深さに、日頃の「用意」を忘れたのも無理のないことである。

老残の身にとっては、ともすれば「用意」を怠り勝ちになる。〈美しき老いを創める〉ことは難しいが、誰しも避けることなく、迎える老境にこそ「用意」がのぞまれるのである。

女五の宮は老いの身を桃園の宮に寄せている。桐壺の帝妹のお一人である。女三の宮が左大臣の北の方。源氏の妻　葵の上の母である。夕霧・雲居雁の祖母であり、大宮と呼ばれる。

源氏は叔母にあたる女五の宮を訪問する。

宮対面し給ひて、御物語聞え給ふ。いとふるめきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮はあらまほしく、ふりがたき御有様なるを、もてはなれ、声ふつつかに、こちごちしく覚えたまへるもさるかたなり。（槿）

女五の宮は源氏にお会いになってお話しになる。大層老いやつれた御様子で、始終咳をしていらっしゃる。

故太政大臣の北の方（大宮・葵の上の母）は、この宮の姉君（女三の宮）でいらっしゃるが、少しも年寄りじみた所がなく、申し分のない美しい御様子であるのに、この女五の宮は、姉宮とまるで違って、声つきもぎこちなく、ごつごつした感じでいらっしゃる。それも、これまでの御境遇上、やむを得ないことである。

これは女五の宮の、これまでの、そして老境における「用意」の問題である。

三の宮羨ましく、さるべき御ゆかり添ひて、親しく見奉り給ふを羨み侍る。（槿）

姉上の三の宮が、お羨しいことで、あなたを婿君とする御縁ができて、いつまでも親しくあなたにお逢いになるのをうらやましく思っております。

冬になって、源氏は再び、女五の宮の雪ふる里を訪ねる。女宮のお姿には、美しく老いを迎える「用意」は少しもみられない。

ねぶたきに宮も欠伸うちし給ひて「宵まどひをし侍れば、ものも聞えやらず」と、のたまふほどもなく、鼾とか聞き知らぬ音すれば（槿）

ねむたくなって来られると、女五の宮は欠伸をなさって「年をとって宵寝をしますので、ねむたくて、お話もよう申しあげられません」と仰しゃると、間もなく、いびきというものか、恐ろしい声がする

老人の「よひまどひ」の「鼾」は、叡山の坂本の小野の庵室で「手

習の君」（浮舟）を脅す。

姫君はいとむつかしとのみ聞く老人のあたりに　うつぶし臥して
いも寝られず。よひまどひは　えもいはず、おどろおどろしき　鼾
しつつ、前にもうちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじと　鼾あ
はせたり。（手習）

浮舟は、平素話に聞いて気味わるく思っていた老尼の部屋に入って、そのそばにうつぶしになったものの、寝ようとして寝られない。宵寝の老尼は、何ともいえない恐ろしいいびきをかいており、その前にも、ずいぶん年をとった尼が、二人寝ていて、母尼君と競争するように大きないびきをかいていた。

宵のうちから早寝をする老人は、また朝早く目ざめる。「鼾の人はいと疾く起きて、粥など　むつかしき事どもをもてはやし」

朝食の粥のことなど、いちいちうるこいことを言って騒ぐのである。老の姿をよくとらえて描いている。

この大尼公は、横川の僧都の母で、八十歳を越し、当時としては長寿であり、老醜の姿も無理ないと思われる。娘の尼君（僧都の妹）も五十歳ぐらいになっている。夫と一人娘を失って尼姿になり、母大尼公とともに山里住いをしているのである。

この尼君については

「女の尼君は上達部の北の方にてありける」

「ねびにたれど、いと清げに　よしありて、有様もあてはかなり」と、その素性の一端にふれ、年はとっておられるが、大層綺麗で、奥ゆかしい趣があり、物腰も上品であると、美しい老の姿をほめている。

老境にあっての「用意」を描いているのである。

宇治の橋姫に仕える「弁の君」は「老人の出で来たる」（老女がやって来て薫の君の応待をする）といって、最初から　老の姿で物語に登場する。薫の君の実父、柏木の乳母の娘で、薫が、源氏の子ではなく、柏木と女三の宮との間にできた子であるという、出生の秘密をもらす。

若い時、高貴の門に出入りしていた、この老女は、それなりに品のよさを身につけていた。物馴れた応待は「なま憎きものから、けはひ、いたう人めきて　よしある声なれば」（橋姫）

（ちょっと小憎らしく感じられるものの、この老女のようすが、相当の人柄のようで、声も品がよいので）薫の君もほっとする。

その後、薫は宇治に行くたびに「老人召し出でて」お逢いになる。「姫君の御後見」として仕えさせている。万事につけて「用意」がなくては後見役は勤まらない。

「年は六十に少し足らぬ程なれど、みやびかに故あるけはひ」の老の姿である。

さて、「心づかひ」（若菜下・初音）「心げさう」（若菜下・初音）「心しらひ」（若菜下）なども「用意」の同類とみられるであろう。

薫香文化の頂点をきわめた王朝人の「用意」は「追風用意」にこそ遺憾なく発揮される。

II 名香・空香・薫物

人柄は　春の夜の闇はあやなし梅の花
追風用意　色こそ見えね香やは隠るる
にこそ　（古今集）

「春の夜の梅の花をよめる」と詞書にあるので、叙景の歌であろうが、これは　すぐ転用される。

闇の中でも、お召しになっていらっしゃる「匂いの衣裳」で恋しいお方はわかります。たきしめた追風用意は、他の人のものでありませんから。―と云った調子である。

「追風」とは「衣服に焚きしめた薫香の匂いを伝える風」「人の歩むにつれて　追いすがる風に、衣服にしみた薫香の放散すること」であり、「通り過ぎたあとに漂う匂」である。

「用意」は「姿用意」「御さま用意」「装束用意」「袖口用意」の用意で「意ヲ用ヰルコト」配慮、工夫、嗜みである。王朝人のオシャレ意識でもある。

王朝人の美意識は、位袍の制に大きくブレーキをかけられた「装束用意」よりも「追風用意」にこそ、最高に発揮されているとみられる。

今日、最高のオシャレは「匂いの衣裳」を身に纏うことにあると言われている。

世界の人々に先駆けて、十世紀頃すでに王朝の貴公子たちは「匂いの衣裳」に、繊細鋭敏なセンスを競い合っていたのである。

四季の匂い、個性の香の意匠が、彼等の遺した「方」（調香処方）に明示されている。

配剤の量目の差が、ある香料はコクをつけるための調和剤となり、ある香料はうま味を出すための変調剤となり、その工夫によって個性的ドレスアップとなる。「匂いの衣裳」に王朝人のオシャレ意識をみる。

追風用意は、歩み去る刻々の空間に残して行く「匂いの通行手形」である。闇にまぎれて、忍び入ろうとしても、他し男の匂いは、恋の関所を通ることが出来ない。

「鼻孔の指南」とか「鼻観ヲ修ム」とか、嗅覚訓練のなされた王朝人は、視界ゼロの闇の中でさえ、通り過ぎて行く人の正体を、その追風用意の、漂い流れる薫物の香によって聞ぎとることができたのである。

衣服に薫物して追風用意をするのも、大陸からの伝来の風習である。

漢詩に次の様な字句が見られる。

「香衫細馬豪家郎」「馬悪衣香欲嚙人」

「唯有羅衣染御香」「為君薫衣裳」

「涙流薫袂」

焚香は古代から、世界の各地で行われていた。恐らく、人類と「火」との関わりあいが生じて間もなく、神との交流手段として、宗教儀式の中から焚香形式が出来あがったものであろう。

香料が神への供香として焚かれた最古の歴史は、四・五千年前、現地人がバーミ・ドゥンヤ（世界の屋根）と称している古代パミール高原の南西部、現在のパキスタンとアフガニスタンの国境辺に繁栄していたヒンドゥー族の手によるものとされている。

旧約聖書の「神の薫香」（エキゾズス第三十章）は焚香として用いられたと思われる。

神がモーゼに「スタクテ」（没薬の一種か）「オニカ」（貝の殻）「ガルバヌム」（樹脂）をとってパーフュームとせよと命じている。パーヒューム（煙によって）とは焚香を意味するものである。

焚香が神への「供香」としての性格をはなれて流行をみたのは、メソポタミヤ文明の発祥地、チグリス、ユーフラテス沿岸の、肥沃な三日月地帯を中心とした、古代のアッシリア王国である。特にバビロンの都市である。

アッシュール＝バニパル王（紀元前七二二―七〇七）は、狂的な薫香の愛好者で、香煙に噎せて窒息死したと伝えられている。

空香は、香煙が空間を清め、土地を清浄化すると信じられ、疫病退散のため、大量の香木、香料が焚かれた記録が残っている。

紀元前、五世紀頃、ギリシャの医師エムペドクレスは　焚香によって　アグリゲンツムの町から病魔を駆逐した

ボッカチオの「デカメロン」の序文に克明に描かれたペストの流行は、十四世紀のヨーロッパ全土にわたっている。

フランスの外科医ギー・ド・ショーリアクは、黒死病対策の一つに、焚香で空気を清めることを提案している。

十六世紀の大疫病の時、ロンドンでは疫病退散のため、街頭で硫黄、硝石、竜涎香、樹脂などを焚いた。（五回にわたる謎の伝染病は一五五二年、英国の医師ジョン・ケイが「粟粒熱」として小論文を書いている。）

追風用意は薫物用意

焚香には、神仏への「供香」、源氏物語で「名香」と言われているのは、この供香である。それから「空香」。儀式の場や部屋の清浄化に焚かれるものである。しかし、ロマンの中心となる焚香は「薫物」である。

追風用意は、薫物にこめられた、工夫、配慮であり、「匂いの衣裳」の意匠であると言える。

追風用意のあり様は、ある時は人間の暖かい血を感じさせ、ある時は凛とした気品を示し、人間関係に節度をもたらす。単に生理的に嗅覚を楽しませるばかりでなく、自ら精神に安らぎを与え、周囲の人

の心を和やかに抱擁する。

追風用意の種々の相を追う。

色こそ見えね　「かかるけはひの　いと、かうばしく　うち匂ふに香やは隠るる　…すべり出でにけり」（空蟬）

忍び寄る人の気配。焚きしめた、その追風に、源氏の君と気づいた空蟬は、生絹の単衣一つを着て、そっと部屋からぬけ出る。あとに空蟬（蟬のぬけがら）のような「薄衣の小袿」が残されている。

霧深くて某はえ見わい奉らざりつるを、この法師ばらなむ　大将殿の出で給ふなりけり。昨夜も御車もかへして泊まり給ひけると申しつる。実に　いとかうばしき香のみちて　頭痛きまでありければ、げにさなりけりと思ひ合はせ侍りぬる。常にかうばしうものし給ふ君なり。（夕霧）

折から霧が深くて、私にはどなたか見分けることができなかったのですが法師たちが「夕霧大将殿がお帰りになるのだ、昨夜もお車を返して、こちらにお泊まりになったのだ」と申していました。なるほど実にこうばしい匂いがあたり一面漂って、頭の痛くなるほどで、いかにも夕霧大将にちがいないと思い当りました。あの方はいつも香ばしい匂いをたたえていらっしゃる方です。

源氏の息子、夕霧大将が落葉宮（親友であった故柏木の未亡人）に通うようになる。宮の母、御息所に、加持祈禱に来ていた阿闍梨が告げている場面である。

濃き霧も、夜の闇と同様である。追風用意にその人の正体がわかる。

踏みしだく駒の足音も、なほ忍びてと用意し給へるに、かくれなき御匂ぞ、風にしたがひて　主知らぬ香とおどろくねざめの家々ぞありける。（橋姫）

踏みしめる馬の足音も、人に聞こえないようと心づかいをしていらっしゃるのですが、隠そうにも隠しようのない、薫の君の美しい匂いが追風につれてあたりに漂い、朝起きの家々では「どなたがお通りになるとも思われないのに、よい匂いのすることだ」と不審がるものもあった。

宇治の八宮を訪う薫中将。夜の暗いうちに、有明の月をたよりに、ごく忍び姿で　馬に乗って出かけたのである。「主知らぬ香」は、古今集の「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも―素性法師」を引用している。

あいにく八宮は山寺に籠って留守。宇治の橋姫、大君と中君は、琵琶と箏の琴で徒然を慰めておられる。

「主知らぬ者」に何となく気づいていたが、迂闊にも、薫の君が訪ねて来たとは考えなかった。

「中将の君　久しく参らぬかなと思ひ出で」とあるように薫中将自身も、御無沙汰をしたと思って出かけて来た程である。

また、たとえ薫君が宇治へ訪ねて来ても、父宮と会うだけで、姫君たちは顔を合わせることがなかった。

あやしくかうばしく匂ふ風の吹きつるを思ひかけぬ程なれば驚かざりける心おそさよと、心惑ひて恥ぢおはす（橋姫）

先ほど、不思議なほど香ばしい匂いのする風が吹いて来たのに、思いがけない折であったので、薫の君の御追風と気づかなかったのは「感じのにぶいことであった」と、たまらなく恥かしがっておいでになるのであった。

薫香と同様に、琵琶、箏の琴の音は隠すことが出来ない。姫君たちは拙い楽の音を聞かれたかと思い、垣間見の恐れもあり「驚かざりつる心おそさ」を恥じるのであった。

宇治の橋姫の異腹の妹、八宮の認知しない姫君浮舟の場合は二人の男性との出会いの始めは、追風に気づいても、それが、自分に懸想していると聞かされた薫の君か、異腹の姉の夫、匂宮か判断がつかない。二人の貴公子に、まだそれ程馴れ親しんでいないからである。

このただならずほのめかし給ふらむ大将にや　かうばしき　けはひなども思い渡さるに　いと恥かしくせむ方なし。（東屋）

自分に一方ならず懸想していらっしゃるとかいう薫大将なのであろか。この香ばしい匂いなどによっても、それらしく想像されるにつけても、ほんとうに恥かしくて、途方にくれることだ。

二条院の西の対屋である。浮舟の手を捉えて「誰そ。名のりこそゆかしけれ。」（あなたは誰です。お名前が聞きたい。）と無遠慮な貴公子は、この二条院の主、つい先ほど対面したばかりの異腹の姉、中の君の夫であった。

薫大将と匂宮、二人の相似た追風用意が、浮舟や侍女たちの嗅覚判断を狂わせ、匂宮の強引な不意うちに逃げられず、一人の女性の悲劇が展開するのは後の巻（浮舟）においてである。

みやび　薫大将と浮舟の初めての出会いは宿木巻である。

ひなび　薫は宇治の八宮の旧邸を御堂に改築することになる。

の追風　工事を検分し、いろいろ指図をしている。そこへ「女車」が、荒々しい東男（東国武士）を大勢供に連れ、宇治橋を渡って来る。

「田舎びたるものかな。」（田舎じみた人たちだなあ）と思い「何人ぞ」と尋ねると、「声うちゆがみたる者」（田舎なまりの言葉の男）が、「常陸の前司殿の姫君の初瀬の御寺に詣でて、」の帰りと答える。

薫はかねて聞いていた橋姫たちの異母妹の浮舟とさとる。

邸内に落ち着いた浮舟の姿を「障子の穴より覗き給ふ」「腰痛きまで」立ちすくんでいる。覗いている気配に気づかれないように、じっと動かないでいる。しかし、追風（薫物の匂い）は隠しようがない。浮舟の若い侍女たちは、薫君のものと気づかず、弁の尼の薫物かと思

う。

「あな芳ばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君のたき給ふにやあらむ。」

と、賞る。年をとった侍女もまた、尼君の追風用意と思う。

誠に　あな　めでたの物の香や。京人はなほいとこそ　みやびかに　今めかしけれ。天下にいみじき事と思したりしかど、東にてかかる薫物の香は　え合はせ出で給はざりきかし（宿木）

ほんとに、まあ何という結構な薫物の匂いでしょう。京のひとはやはりほんとに風雅で、花やかなのですね。（常陸守の奥方様。浮舟の母）は天下にすぐれた調香の上手のように、思っていらっしゃいましたけれども、東国では、このように結構な薫物の香は、よう調合なさることはありませんでしたよ。

京と地方の文化的洗練度が、練香（薫物）にも落差があると言うのである。

噂の中で間違えられた当の弁の尼は「人の咎めつるかをりを近くて覗き給ふなめり」（人々の気づいた薫物は、薫の君の追風で、かの君が近寄って姫君をおのぞきになっていられたのであろう）と推察したのである。

薫大将の「みやびかに」都会的に洗練された追風は、彼の生まれながらの体臭に、すぐれた「方」の薫物がとけ合って、芳香を放っていたのである。鄙育ちの人々の嗅覚を驚かしたのは当然のことである。

薫君が三条の小家（東屋）に、浮舟を迎えに行った時も、その「みやび」の追風用意が、「東の里人」を驚かせる。

里びたる簀子の端つ方にゐ給へり。

さしとむるむぐらやしげき東屋の

あまりほどふる雨そそぎかな

と、うち払ひ給へる追風　いとかたはなるまで、東の里人も驚きぬべし。（東屋）

田舎じみた縁側の端の方に腰かけておられ、「誰か戸を開けるのを引きとめる者があるのだろうか。雨の降りそそぐこの東屋の軒先に、あまりに時間が過ぎるまで待たせて置かれることだ。」と、詠んで、雨のしずくをお払いになる袖から薫ってくる匂いが、あきれる程こうばしいのには東国育ちの、田舎者も驚いたことであろう。

拡がり散る　薫物の「方」には、今日の調香家の「匂いの設計」に芳香　　払う創意、工夫に共通したものがうかがえる。その一端に、匂いの拡散性（周囲への広がりであるが、主としてヨコへの広がりとみられる。）揮発性（匂いの立ちのぼりであり、タテへの発香性であろう。）に対する「用意」がみられる。そして一過性の芳香にブレーキをかけ、持続性を考慮する。多くは秘事、口伝になっていた。今日の香水にも保留剤としてムスク、シベットなどが用いられて

いるが、王朝の練香にも麝香の少量が匂いの保留剤として調合されている。

押し拭ひ給へる御袖の匂も　いと所狭きまで薫りみちたる…（夕顔）

源氏の君が乳母（随身惟光の母）の尼君の病床を見舞う。たきしめた追風用意は、涙を拭うという静かな袖の動きにも、あたり一面に、芳香を漂わせる。若き日の源氏（十七歳の夏）の薫物は、拡散性の強いものを用意としたようである。

月もなき頃なれば、遣水に篝火ともし、灯籠などにもまゐりたり、南面いと清げに　しつらひ給へり。そらだきもの　心にくく薫り出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いと異なれば、うちの人々も心づかひすべかめり。（若紫）

つごもりの闇夜のころであるから、庭の遣水の所々に篝火を焚き、灯籠などにも灯をいれた。南面（正面の室）に御座所をもうけ、大層美しくしつらえられた。空だきもの奥ゆかしく香り出で、仏前の名香（供香）なども、あたりに匂いみちているところへ、源氏の君の御追風が、お動きになるにつれて、格別漂い流れるので、奥にいる女性（若紫の祖母の尼公、侍女たち）たちも気をつかわれるようである。

源氏が、「わらは病」の加持祈禱をうけに北山の「行人」（修験者）をたずねる。同じ山に住む僧都（若紫の祖母の兄）の坊に招かれる。場所がらから、仏前の名香の香が漂い、空香は近く部屋の女性たちの「用意」であろうが、そこはかとなく、奥ゆかしい薫りが流れて来る。

そうした中でも、源氏の君の追風用意は格別であった。

「三月の晦日」春も過ぎようとしている。薫物も「梅花（香）」の季節ではない。ことに北山の霊場に行くには「荷葉（香）」（荷香ニ擬スルナリ。夏月殊ニ芬芳ヲ施ス）がふさわしい。あるいは季節に関係なく「侍従」「黒方」といった薫物をたきしめたのかも知れない。

風烈しう吹きふぶきて、御簾の中の匂ひいと物深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御にほひさへ薫りあひ、めでたう極楽おもひやらるる夜のさまなり。（賢木）

外には烈しい風が吹き、吹雪いている。御簾の内の匂いは、まことに奥ゆかしい黒方のかをりがしみ渡り、仏前の香煙もほんのりと白くただよっている。その上、源氏の大将の御衣にたきしめた香までが、いっしょになって匂い、極楽浄土を思わせる夜の雰囲気である。

「十二月十余ばかり」の頃である。出家した藤壺の御簾のうちより漂う黒方は、冬の季節の追風用意である。

「黒方」は、「冬、凍氷ノ時。深ク其ノ匂ヒ有リ。寒ニ封ゼラレズ。」（薫集類抄）

「冬ふかくさえたるに。あさからぬ気をふくめるにより。四季にわ

たりて身にしむ色のなつかしき匂ひかねたり。」（後伏見院宸翰薫物方）

「およそ黒方四季に通用す」とも言われている。

ほのかな仏前の名香も、源氏の大将の追風用意も、藤壺の「物深き黒方」の補助的役割をはたしている。これは拡散性を押えた、物静かな芳香である。

御簾よりの　御簾の中の女性たちの動きは、多くは身じろぎ程度であるが、それなりに追風用意がなされている。

追風

とかう　そそのかされて　ゐざり寄り給へるけはひ　忍びやかに、衣服の香　いと懐しう薫り出でて　おほどかなる（末摘花）

姫君は女房たちにあれこれと勧められて（ふすま近くへ）いざり寄って来られる様子が、もの静かで、えび香の匂いが大層ゆかしく人なつかしく漂って来て、全体の気分がいかにもおっとりとした感じである。

忍びやかにうち身じろぎ給へるけはひも袖の香も　昔よりはねびまさり給へるにやと思さる。（蓬生）

静かに身動きなさった様子や、それにつれてただようて来る袖の薫りなどから推察して「以前よりは大人らしく成長されたか知ら」と思われる。

末摘花はむしろ醜い容貌で、その上古風な性格であるが、宮家の姫君といった育ちの良さが、落魄し経済的に困窮しても、しっとりとした、人懐しい追風用意などにあらわれている。

源氏方のライバル、弘徽殿女御の実家、右大臣邸の華美好みな雰囲気と対照的である。

そらだきもの　いとけぶたう燻りて、衣のおとなひ　いと花やかにうちふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたり（花宴）

空だきものの煙が、けむったい程にかおっており、女房たちの立ち居する衣ずれの音も、いかにも花やかな身のこなし方で、一体に、気恥しいような、奥ゆかしい風情に欠けていて、当世風なはで好みの家風でいらっしゃる邸である。

こうした家風の御簾の中の姫君たちの追風用意には、しっとりと落ちついた、ゆかしさはみられない。

おなじ花やかさ、明るさを　たたえながらも、春の殿（紫の上）の雰囲気には軽薄さはみられない。御簾の中から漂い出る追風は、折から花咲ける梅の香と調和し、迦陵頻迦にまがえる鶯の妙音も聞こえ、極楽浄土を思わせる程であると、作者は理想の女性の住まわれる御殿の様子を讃美の筆で描いている。

春の殿の御前とりわきて、梅の香も　御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。さすがにうちとけて安らかに住みなし給へり。（初音）

紫の上の御殿のお庭は、梅の香が春風に吹き匂うのも、御簾のうちからの追風用意の梅花香と思い迷われ、この世ながらの極楽浄土を思われるのである。さすがにのんびりとしたお気楽なご生活である。

六条院の初春である。源氏は春の御殿をはじめ、次々と御方々のお住居を訪ねる。

明石の御方に渡り給ふ。近き渡殿の戸をおしあくるより、御簾の中の追風なまめかしく吹き匂はして、ものより殊に　けだかく思さる。正身は見えず……

わざとめき、よしある火桶に侍従をくゆらかして、ものごとにしめたるに、衣服香の香のまがへる　いと艶なり。（初音）

明石の上のお住居へお出でになる。そのお住居に近い渡り廊下の戸をおしあけるとすぐ、御簾の中からたきしめた香のかおりを吹き送る風が、優雅なにおいをただよわして来て、その心づかいをまず何よりもすぐれて気品が高いとお思ひになる。ところが御本人の明石の上のお姿がみえない。……

特別に意匠をこらした品のよい丸火鉢には、侍従香をくゆらしてあたり一体にゆかしいかおりの漂うように、念を入れてたきしめてあるところへ、どこからともなくえび香の匂いがまじってくるのは実にあでやかな趣である。

「侍従」（香）薫集類抄に「亦名　拾遺補闕。秋風蕭颯として心にくきおりによそへたるべし。」とあって、秋の季節の香としているが、ここでは初春の火桶の中でくゆっている。恐らく黒方（香）などと同様、四季に通じて用いられたものであろう。

侍従は官名で中務省に属し、常に君側にあってお世話をし、かつ、天子の過失を救う役である。中国の唐書「百官志」に「補闕拾遺、掌供奉調諫」とある。薫物の名に転用されたのは四時にわたって、常に焚きしめられ、離れることなきこと侍従のごとしの意からであろう。黒方とともに主人に付き添う匂いの妖精である。

吹きくる追風は、侍従の香に殊に匂ふ香のかをりも　触ればひ給へる　御けはひにやと、　いと思ひやりめでたく心げさうせられて（野分）

御殿の方から流れてくる追風（たき物の匂い）は、侍従香の中でも格別にかをりの高いのは、中宮が身じろぎをなさる、そのお召物から漂うてくるのかと、誠に奥ゆかしく思いやると、夕霧の方でも、自然心づかいがせられて…

秋の季節の侍従香である。野分（秋の台風）のお見舞いに、夕霧中将が秋好中宮（六条御息所の娘）の御殿へ参上する。御簾の中から、

中宮の追風用意の格別な薫香が漂うてくる。

薫香は人の心をひきしめる。夕霧も自然と「心げさう」することになる。中宮の「用意」に感応する「用意」である。

御簾よりもさらに身近な、めぐらした几帳の帷子（垂れ布）から漂いでる追風も「ほのめく」程度のゆかしさは、懸想人の「うちしめりたる宮の御けはひ」に対して、ふさわしい「用意」である。

六条院における「対の姫君」（玉鬘）が、蛍兵部卿の宮に応対する場面で、彼女の傍に源氏が蛍を包みかくして控えている。その源氏の御衣の匂いが、玉鬘の追風用意に立ち添って、深々とした香気があたり一面に満ちる。「えならぬ羅の帷子」が夏の風情を語っている。

御几帳ばかりを隔にて近きほどなり。……

うちよりほのめく追風も　いとどしき御匂の立ちそひたれば　いと　深くかをり満ち……（蛍）

人香（体臭）　「かの薄衣は　小袿の　いとなつかしき人香にしめ

追風のベース　るを　身近くならしつつ見る給へり」（空蟬）

持ち帰った空蟬の脱ぎすてた薄衣は、彼女の人香（体臭）のしみこんだ小袿だけになつかしく、源氏の君はいつも身近かに置いてながめていらっしゃる。

「人香」は体臭であり、官能美を想わせる語であるが、源氏物語に時折出て来て、はっとさせる表現である。

生来の肌の匂いに、追風用意のミックスした個性の体臭である。

「人香」という表現には「移り香」などより、よりその人を身近に引き寄せて感じ、抱きしめたい程の、切ない思慕の情がにじみ出ている。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

蟬が姿をかえて、空蟬を木のもとに残して行ったように薄衣を残して、つれなく逃げてしまった人ではあるが、やはりその人柄がなつかしく心惹かれることだ。

人妻であっても、思がけなく受身的に不倫に陥ることの多かった当時、一度の過失は過失として、できるだけ貞節を守ろうとする。伊予介の若き後妻、空蟬に「なほ人がらのなつかしきかな」と心惹かれるものがあった。

源氏が須磨に退去し、二条院に取り残された紫の上が、まるで死別したかのように悲しんで抱きしめる彼の「ぬぎ捨て給へる御衣のにほひ」（須磨）は、まぎれもなく「人香」である。

逆にゆるされて都に戻る源氏が、明石の上との別れに、日頃身につけていた衣類を贈る。

かたみにぞ更ふべかりける逢ふことの日数へだてむ中の衣を

再び逢うまでには、日数のかかる私たちの仲ですから、この中の衣をそれまでの形見として着がえましょう。

明石の上の仕立てた「狩の御装束」を「せっかくの厚意だから」とお召し更えになった。そして、今までお召しになっていた装束類をお贈りになる。

「中の衣」は「人香」に沁みた、思い出種となる。

和琴をひきよせ給へれば、律に調べられて、いとよく弾きならしたる、人香にしみて　なつかしうおぼゆ。（横笛）

（柏木の未亡人落葉宮を訪ねた夕霧大将は）和琴をひき寄せてみると、律の調に合わせられてあって、これまでよく弾きならした故柏木衛門督の人香にしみて、なつかしい思いにかられる。

「故君の常に弾き給ひし琴」―音楽の道に堪能であり、和琴の名手であった故君（柏木）が在世中、常に弾いておった楽器だけあって、「移り香」というには物足りない。沁みこんでいるのは、まさに彼の体臭「人香」である。もて馴した人の怨念がつきまとうような、人間と楽器の密着状態を「人香にしみて」と表現しているのである。

柏木秘蔵の横笛を贈物にと譲られた夕霧の、その夜の夢に、衛門督があらわれ、笛を取り、これを渡す人が別にいるという。その人は誰と問わんとして夢さめる。夢語を聞いた源氏は、薫君に渡したかったのだとさとる。

横笛はもちろん柏木の「人香」のみならず、執念のつきまとう楽器であった。

「人香」に沁みるものは、何といっても肌身につける衣服であろう。

小袿かさなりたる細長の、人香なつかしうしみたるを、とりあへたるままに　かづけ給ふ。（竹河）

玉鬘は、細長（女性の表着）に小袿をかさねた、人なつかしい、彼女の人香にしみたものを、その場にありあわせたまま、四位の侍従（薫君）へ、御祝儀にお贈りになる。

薫香夢幻の中から生まれたロマンが源氏物語であると言えそうである。殊に「匂ふ兵部卿宮」「薫る大将」は薫香の化身である。

物語後半の宇治十帖は、この二人の「にほひ」の妖精に操られた一人の女性の悲劇である。

官能美と精神美との間に漂う「浮舟」の運命、その歯車を狂わせたのは、二人の貴公子の相似た追風用意であった。

しかし、両者の薫香には自ら違いがあった。

生得の体臭と、人工の体臭との差である。「鼻孔の指南」（嗅覚訓練）が徹底していたならば、あるいはその違いに気づいたかも知れない。二人の追風用意、いささか長文であるが引用してみる。

薫君の　香のかうばしさぞ、この世の匂ならず。あやしきまで、う

人香　ちふるひ給へるあたり、遠く隔てたる程の追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。

誰もさばかりになりぬる御有様の、いとやつればみ、ただありなるやはあるべき。さまざまにわれ人に勝らむと　つくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで、うち忍び立ちよらむ物のくまも、しるきほのめきの、かくれあるまじきに、うるさがりてをさをさ取りもつけ給はねど、あまたの御唐櫃に、埋もれたる香の香どもも、この君のは、いふよしもなき匂をくはへ、御前の花の木も、はかなく袖かけ給ふ梅の香は春雨の雫にもぬれ、身にしむ人おほく、秋の野に主なき藤袴も、もとの薫はかくれて、なつかしき追風　ことに　をりなしながら　なむ勝りける。（匂宮）

（薫君の身にそなわっている）香のこうばしいことは、この世の匂いではない。実に不思議なほど薫りの高いもので、ちょっと身動きをなさるあたりから、遠く隔っているところまでも、その匂いをただよわせて吹いて来る風の薫りが、ほんとうに（あの百歩香という香の名の通りに）百歩以上離れたところまでも匂って来そうに思われるのである。

誰にしても薫ほどの高い身分になった人で、そんなにわざとらしく粗末な姿をしても、身だしなみ一つしないという人のあるはずがない。いろいろと自分を人よりもよく見せようと、とりつくろい、身だしなみをするもののようであるのに、（薫は、からだの匂いが）こんなにひど過ぎるほどで、そっと（のぞき見しようとして）人に見えない物かげに立ち寄っても、高い薫りがはっきりただよって、隠れようがない。（すぐ人に気づかれるのを）うるさがって、ほとんど追風用意をなさらないのであるが、それでも、たく山の唐びつにいろいろの香がおさめられてあって、それがまたこの君のものというと、何ともいいようのないよいかおりがして、お庭さきの梅の気でも、この君がちょっと袖を触れられた花の香は（格別よいかおりがするので）春雨の雫にぬれながらも、その香を身にしみこませる人が多く、秋の野に（誰がぬいだのか）主の知れぬ袴のようなよい香をもっている藤袴も（この君が立ちよられると）もとの匂いはうち消されれて、ただこの君のあたりから漂ってくるなつかしい追風が格別で、この君が花を折りとることによって、一段と匂いがよくなるのであった。

匂宮の追風用意　薫中将が「かく怪しきまで人の咎むる香にしみ給へる」のに対して、匂兵部卿宮は「挑心」を持たれ、せっせと追風用意をなさるのであった。

兵部卿宮なむ、ことごとよりもいどましく思して、それはわざと万の勝れたるうつしをしめ給ひ、朝夕のことわざにあはせ営み、御前の前裁にも、春は梅の花園をながめ給ひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にも、をさをさ御心うつし給はず、老いを忘るる菊に、衰へ行く藤袴、ものげなき地楡などは、いとすさまじき霜枯の頃ほひまで、思し捨てずなど、わざとめきて、香にめづる思ひをなむ立てて好ましうおはしける。……例の世の人は、

匂兵部卿、薫中将と、聞きにくくいひつづけて、…（匂宮）

兵部卿宮は、ほかの何事よりも、この匂いの点で、薫中将と競争したいと思われて、ただ（薫のように身にそなわる匂いはないので）わざわざいろいろのすぐれた薫物をたきしめて、朝夕のお仕事といえば、ただ薫物の調合にばかり夢中になって、お庭先の草木をごらんになるにしても、春は（匂いのすぐれた）梅の花園をながめて、その香りを移したいとお思いになり、秋は（花の色が美しいといって）世間の人のもてはやす女郎花や、男鹿がわが妻として親しむ萩の露などにも、（よい匂いがないというので）ほとんど目をおむけにならず、ただ老を忘れるという菊や衰えて行く藤袴や、何の見ばえもしない吾亦紅などは、香がすぐれたものとして、すっかり見るかげもなくなる霜枯のころまで、お見すてにならなかったりして、あまりにわざとらしいほど、その匂いを愛する趣味を主として、風流がっておられた。

…例の通り世間の人たちは、（この、世にも薫り高いお二人をならべて）「匂兵部卿、薫中将」と、聞きづらいほど、やいのやいのと噂を立てる。

源中納言は、かうざまに好ましうは焚き匂はさで、人香こそ世になけれ。怪しう前の世の契り、いかなりける報いにかと、ゆかしき事にこそあれ。（紅梅）

源中納言（薫君）は匂宮のように風流がましくは焚きしめないでいて、生まれながらにその身にそなわる香り（人香）が、世に類がありません。いかにも不思議なことで、前世で、いかなる善いことをなさった因縁で、ああした果報をお受けになったものか、あの方の前世がゆかしく思われます。

同じ薫香の化身でも、二人の貴公子の、作者による性格づけの相違が、はっきりうち出されている。

匂宮の追風用意は、現実の世界でも納得できるが、薫中将の生得の芳香体臭については、本居宣長は「玉の小櫛」で「此物語は、さるあやしき、つくり事めきたることはかかず、みな世にあるさまの事なるに、此事のあやしきはいかなることにか。」と首をかしげている。

古註に聖徳太子について「一抱太子数月懐香異朝有例」異朝の例は「宋ノ大祖、皇帝諱匡胤、洛陽ノ夾馬営トイフ所ニテ生レ給ヒシニ、其ノ所異香アル事一月ナリ。人コレヲ香孩児営トイヒシ事ナリ。」

本朝、異朝の例をあげて、生まれながらの人香（体臭）に芳香を放つ者のいることを納得させようとしている。

人香（体臭）　生得の体臭に、周囲の人を驚かすほどの異香を放つものが、あるのかどうか分からぬが、追風用意が、

づくり

薫香を加熱して「匂いの衣裳」を身に纏うことを主に考えられているのに対して、体内からの「人香づくり」の記録がある。

「薫集類抄」（群書類従所載）は後世の写本であるが、古来の伝承の記録を含むものである。この書に「薫衣香」「令人躰香」が、体臭

づくりの内服薬であることを伝えている。

薫衣香。一名躰身香。八条宮の処方や、公忠朝臣の処方とともに「或方」として、次の様な調合法と、その効用が記されている。

丁子。藿香。零陵香。青木香。甘松。
白芷。当帰。桂心。檳榔子。

右ノ十物。細ク搗キ。絹篩ニテ粉ト為ス。蜜ヲ以テ和シ搗クコト一千杵。然ル後出ス。丸メテ棗核ノ如クス。口ニ含ム咽汁。昼夜三日ニ至ル。十三丸ヲ含ム。当日自ラ口香ヲ覚ユ。五日ニシテ自ら躰香ヲ覚ユ。十日衣服亦香シ。二十五日手ヲ洗ヒテ水ヲ落トセバ地香シ。一月已後児ヲ抱ケバ児マタ香シ。……

令人躰香。
甘草。瓜子。大棗。松皮。已上分等。末飡服スルコト方寸ノ匕三也。百日衣服甚香シ。※註・飡（夕飯）。食事前に四角なさじで三杯服用する。

「通ひ夫」を辟易させた学者妻の猛烈な体臭は「蒜」（にんにく）のせいである。

「月頃風病重きに堪へかねて、極熱の草薬を服して、いと臭きによりなむ、え対面賜はらぬ…」

漢文口調はさすがに学者妻。読者の笑いを誘うところ。作者のユーモア精神、サービス精神の表現である。

「極熱の草薬」は煎じたものであろう。「蒜仁仁久」は薬用になったのである。また古来、食卓に風味を添えるものであった。

醬酢爾蒜都伎合而鯛願吾爾勿所見
水葱乃煮物（万葉集・巻十六・三八二九）
ひしほ酢（二杯酢）に蒜を搗き加えて鯛がたべたい。
つまらぬ水葱の羹など見せてくれるな。

いずれにしても蒜は食すれば、恋人も三舎を避ける口臭となり、体臭となる。

「浴湯香」（薫集類抄）の処方も残っているが、中国の古典「楚辞」にも「蘭湯」の文字が見える。保健・衛生のため、沐浴・入湯により身体を清浄にし、芳香を漂わせる知恵は古くからはたらいていたようである。

菖蒲湯、桃葉湯、丑湯、柚湯、など、同じ発想によるものである。ただ王朝貴族の生活は、陰陽道などによるブレーキがかけられ、洗髪、浴湯は、何時でもという訳にはいかなかったのは気の毒である。体臭づくりについては、千一夜物語、インドの愛の聖典カーマスートラなど、古今東西の記録が残されているのは周知の通りである。

追風用意の「移り香」は、時に誤解を招き、一騒動の因となる。夫や妻の、ふだん馴れ親しんだ薫香の移り香は問題

にならないが、誰かわからぬ他人の移り香は悲喜劇を生む。

「色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」（古今集）梅の花の香を誰かの「移り香」とみる。嫉妬の心を詠ったものでなければ幸いである。

「梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる」隠しようもない移り香に困惑しているのである。単なる梅の香であったら問題ないが、色模様の多かった貴公子の行状が「香にあらはるる」ことが多かったのである。

紙燭召してありつる扇御覧ずればもて馴したる移香いとしみ深うなつかしう（夕顔）

手燭をとり寄せさせて、さきほどの扇をごらんになると、使いならした人の袖の香が深くしみこんだ、なつかしい感じのする扇である。

「もて馴らしたる」扇であれば「人香にしみて」と書いてもよい所であるが、まだ夕顔に源氏は親しく逢っていない。「移香」は両者に距離のあることを示している。

宮わたり給へり。…近う呼び寄せ奉り給へるに　かの御移香のいみじう艶にしみかへり給へれば「をかしの御にほひや御衣はいとなえて」と心苦しげに思いたり。

源氏はまだ夜のあけないうちに帰られた。その日紫上の邸に父宮がお出でになった。…姫君をおそばへお呼び寄せになると、源氏の君のお召物からの移香が、たいへんなまめかしく沁みこんでおられるので、「ああ風情のあるよい匂いだ。それにしてもお召物が大層しわになって」と、姫君の身の上をいじらしくお思いになる。

紫の上はまだ幼く、父宮（兵部卿）と源氏の君とは、日頃親密にしている間でない。移香の正体がわからない。

うちしめりたる御にほひの　とまりたるさへうとましく思さる。人々御格子なむ参りて「この御茵の移香いひしらぬものかな…（薄雲）

源氏の君のお立ちになったあとに、しんみりとした薫物の匂いが漂うているのさえ斎宮はうとましくお思いになる。（斎宮の気持ちを知らない）女房たちは、格子戸をおろし「この御しとねの移香は、まあ何というよい匂いでしょう」と話し合っている。

斎宮にとってともすれば懸想じみたけはいを示す源氏は煩わしき人である。その人の追風はうとましいものである。移香のしとね（敷き物）に沁みついて離れないのも厭わしい。

源氏の君は亡き母六条御息所の恋人である。彼の後見に感謝しつつも、ともすれば、「煩はしき移香」を避けたいと思われる。

猫を招きよせてかき抱きたれば、いとかうばしくて　らうたげにうち鳴くも　なつかしく思ひよそへらるるぞ　すきずきしきや（若菜

上）

（柏木は）やるせない心の慰めに、猫を呼びよせて、胸にだきしめていると女三宮の移り香がして、かわいい声でなくのを聞くにつけても、彼がこの猫を女三宮に思いなぞらえて、なつかしく感じているのも、あまりに色めかしいことだ。

「移香」の文字はないが、思慕する人が可愛がっていた猫を抱けば、猫はその人の移り香にしみて、その人を抱きしめる思いである。器物への移り香とは違い、暖かい体温をもった猫は、愛する女性の、より身近かな人香にしみて官能にせまる移り香に匂う。

嫉妬の　若君の一夜宿直して、罷り出でたりし匂のいとをかしか
移り香　りしを　人はなほと思ひしを　宮のいと思しよりて「兵部卿の宮に近づき聞えにけり。うべわれをばすさめたり」と気色どり、怨じ給ひしこそをかしかりしか。

先夜、若君が宮中に宿直して、翌朝さがって来ました時の匂いが大層よい薫りでしたのを、ほかの人は、やはり当人の追風と思っておりましたが、春宮がすぐお気づきあそばして「そなたは匂兵部卿宮のおそば近くにあがっていたね。道理でこの頃、私を厭いて来た」と若君の様子を推察してお嫉みあそばし、お怨みなさったのは、おもしろいことでした。

紅梅大納言の奥方（真木桂）が夫に、宮中での話をする。「若君」は夫妻の息子である。匂宮に親しく近づいているのを、東宮がその移り香で気づき嫉妬なさった話である。嗅覚訓練がなされ、身近な匂宮の追風用意はよくおわかりになっている春宮である。移り香の正体を見破ったのである。

薫君に負けまいと追風用意に余念のなかった匂宮も、それだけに嗅覚は鋭敏で、特にライバルの追風、体臭は熟知している。

宮はいとど限りなうあはれと思したるに、かの人の御移香のいと深うしみ給へるが世の常の香のいかにいれ、たきしめたるにも似ず
しるき匂なるを、その道の人におはすれば、あやしと咎めいで給ひて…（宿木）

匂宮はこの上もなく中の君を愛しておられたが、そのお召物に、薫君の御衣の移香が深くしみこんでいる。その匂いが世間にありふれた香の匂とは全く違って、薫の君以外のものではないと、はっきりわかるかをりであるので、殊に匂宮は香の道にすぐれた方でいらっしゃることとて「これは変だ」とすぐ気づかれて「これは一体どういうことなのか」と、そのようすをおただしになる……

匂宮は薫君の仲立ちで、中の君と結ばれ、二条院に迎えたのであるが、宇治の橋姫時代から兄妹の様に面倒をみる薫中納言との仲を自分の「花心」（浮気心）から疑っている。

夕霧左大臣の姫君六の君の婿となった匂宮は二条院を留守にするこ

とが多くなった。

夫の花心に悩む中の君を、慰めようと二条院に参上した薫は、つい中の君に近寄る。「移り香」の「かばかりにては、残りありてしもあらじ」（これ程しみついているようでは、二人の間はもう何の隔てもなく、すっかり結ばれているのだろう」と匂宮は責める。中の君はなさけなくて、身の置き所もない。

しかし、薫君は匂宮とは違う。決して「あながちなる」（無理な）行為に出ることはなかった。

○また人になれける袖の移香を我身にしめて恨みつるかな（私よりほかの人に馴れ親しまれた、その人の移り香が、あなたの袖に残っているのを知るにつけても、身にしみてうらめしく思うことです。）

○見なれぬる中の衣をたのみしをかばかりにてやかけはなれなむ（あなたとは長い間馴れ親しんで来て変わらぬ仲と信じておりましたのに、この移り香ぐらいのことで御縁が切れてしまうのでしょうか。）

歌の応酬などあったが夫婦の危機は去る。「移り香」騒動は当時珍しくなかったようである。

もて余す　たとえ頂戴した御衣でも身分不相応な薫香がしみこんで

移り香　いては着ても人を驚かすばかりである。薫の君から露に

ぬれた狩衣を貰った宿直人は、その移り香をもて余す。

宿直人かの御脱すての艶にいみじき狩の御衣どもえならぬ白き綾の御衣のなよなよといひ知らず匂へるを　うつし著て…似つかはしからぬ袖の香を…いとむくつけきまで人の驚く匂ひを　失ひてばやと思へど、所せき人の御移香にて　えすすぎ捨てぬぞあまりなるや。

（橋姫）

例の宿直の男は、薫君が、先日脱ぎ捨てておやりになった非常にあでやかな狩衣―何ともいいようのない程美しい白い綾織の御衣で、やんわりとしたいうにいわれぬよい匂いのしたものをそのまま着て…（彼の身分に）いかにも不似合いな袖の香がする…この気味がわるいほど人の注意をひく匂いをとってしまいたいと思うのであるが、立派な御身分の方の御移香のこととて、そう思いきって洗い捨てることもできず、その処置に困惑しているのも無理ないことであろう。

かの御移香もてさわがれし宿直人ぞ鬘髭とかいふ　つらつき心づきなくてある（椎本）

例の移り香の高い狩衣をいただいて、はやし立てられた宿直人はかづらひげとかいういかめしい面つきをした気持ちのわるい男である。

身分不相応ばかりでなく、ひげづらの容貌では、優にやさしい「御移香」はふさわしくないと言うのであろう。

調度品や居間の常によりかかっている真木柱、坐している茵などへの移り香はまず無難と言うべきであろう。

丁字染の扇のもてならし給へる移香などさへ、たとへむ方なくめでたし（宿木）

薫君がふだんお持ち馴れの丁字染の扇の移り香などまでがただようている様はたとえようもなく立派であった。

寄り居給へりつる槇柱も茵も名残匂へる移香言へばいとことさらめきたるまでありがたし（東屋）

（浮舟の母の心の中で思うよう）薫大将が寄りかかっていらっしゃった真木柱も、お坐わりになったおしとねも、あとに残っている移り香が、今さら言うのもわざとらしく思われる程、世にも珍しい匂いが漂っていることだ。

常陸守の奥方（浮舟の母）は東国では薫物の上手と思われていたが「京人」の「みやび」に及ばぬと侍女たちに噂された人である。

浮舟が常陸守の実子でないと知るや婚約を破棄した左近少将を、薫大将と比較し、卑小なものとさとる。

浮舟の運命がやがて匂いの精に操られ、思わぬ方に展開する。

人生劇場―人間の演ずるさまざまなドラマが「匂いの意匠」で飾られた舞台空間で展開する―これが王朝人の日常である。

彼等の、いわば薫香生活は、自然の花香も参加し、追風用意、空香、名香　を三本柱として営まれている。

空香は　そら焚きは、室内、屋外を問わず、その場の空間を浄化ムードづくりする役割とともに雰囲気づくりをなす焚香である。

英王室のエリザベス一世は、五つの「香いの間」を持っていたと記録されている。

「ラヴェンダーの間」「シトロンの間」「スミレの間」「バラの間」「サンダルウッドの間」である。「白檀の間」は焚香によるとも考えられるが不詳である。しかし、いずれも空香同様、空間に芳香を放つ「匂いの意匠」であることは間違いない。

「蘭房」「蘭閨」は婦人の美しい寝室であるが「薫浴」は芳香療法である。中国では、古来蘭の佳香を愛し、その薫香を浴びることによって不老長寿をねがったものである。

婦人の寝室の美的表現ばかりでなく、実際に蘭花の芳香が「空香」の役割を果していたものと思われる。

ギリシャの昔、貴族や富裕な者たちは、天人花、没薬、乳香をくゆらせたという。ローマにもこの風習が伝わり、居間、寝室、食堂にまで佳香を漂わせたという。空香の歴史は古く、広いようである。

さて、空焚にも、それなりに「用意」が必要である。やたらに香木、薫物を焚けばよいと言うものでない。また空香に、自然と、「家風」「人柄」があらわれる。

「そらだきもの心にくく薫り出で」（若紫）

「そらだきもの心にくき程に匂はして」（蛍）

と、あるように「心にくき程」に焚くことが肝要である。

火取ども　あまたして、けぶたきまで　あふぎちらせば、さし寄り給ひて

「そらにたくは　いづくの煙とぞ思ひわかれぬこそよけれ。富士の峰よりも実にくゆりみち出でたるは本意なきわざなり。……」（鈴虫）

火取（香炉）などたくさん置いて、煙たいほど香をあおぎ散らしているので、源氏の君は女房たちの所へお近づきになって、

「そらだきものは、ただほんのりと匂っていて、どこでたいているのか分からないのがよいのです。こんなに富士の峰の煙よりも多いほど、あたり一面にけぶっているのは面白くないことです。」

源氏の君が「物深からぬ若人」（思慮の足りない若い女房たち）に「用意教へ給ふ」（心づかいするよう御注意になる）

「心にくき程」とは「いづくの煙どぞ思ひわかぬ」程度である。

「家風」が「空香」にあらわれたのは、若き日の源氏の君が、花の宴（藤の花）に招待されて訪れた右大臣邸である。万事、華美好みでしんみりと落ちついた奥ゆかしさに欠ける家風である。

そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣のおとなひいとはなやかにうちふるまひなして心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたりにて（花宴）

名香　供香の文字は、源氏物語にはない。すべて「名香」である。

―供香―

これが仏前に供える香である。

「名香の香など匂ひみちたるに」（若紫）

「名香の煙もほのかなり。」（賢木）

「名香に唐の百歩の香をたきたまへり。」（鈴虫）

「荷葉の方を合はせたる名香」（鈴虫）

「名香のいとかうばしく匂ひて」（総角）

など頻出し、浄土思想の浸透を物語っている。

鈴虫巻の冒頭は「夏ごろ、はちすの花の盛りに」女三宮の御持仏供養の模様を描いている。「唐の百歩の香」と「荷葉の方を合はせたる名香」とが一つに調和して、実にゆかしいと述べている。仏前の焚香は一種類でなかったのであろう。唐伝来の処方による名香と、夏季にふさわしい荷葉の方の名香とが焚かれたのである。荷葉は蓮花の香で仏縁が深い。

荷葉　荷香ニ凝スル也。夏月殊ニ芬芳ヲ施ス。（薫集類抄）

夏の薫物であるが、処方の記録は意外に少ない。右大臣公忠朝臣が、村上帝の天暦六年（九五七年）二月二十一日（甲午の日）進上した荷葉香の方が一例見らるるのみである。追風用意とするよりも名香

として多く用いられたのであろう。

王朝で、すでに読誦されていた法華経に、摩訶曼陀羅華（大きい白い蓮の華）、摩訶曼珠沙華（大きい赤い蓮の華）が詠われている。

雪山（ヒマラヤ）を背景にして咲く、美しい蓮の華が、天上界の聖なる華として昇華したものであろうか。

漢詩には「荷風送香気」（孟浩然）、「荷香満四隣（裴度）と蓮華の芳香を詠っている。

万葉集にも四首の「蓮」の歌があるが、花香が全面に出ている歌ではない。

「百歩の香」については「承知百歩香」（薫集類抄）の方に「此ノ方四条大納言家ヨリ出ヅ。大江千古上シ所ノミ。」とある。梅花、荷葉といった特定の香名ではなく「百歩之外聞香」で、遠距離まで匂いが届く香を称したもののようである。

「焼香法」「印香法」「供養香」「金剛頂経香」「観世音菩薩留滋香」などは、王朝以降、仏家に伝わる「名香」の方であろう。

反魂香　宇治の橋姫の大君が、亡き父八の宮を恋いしのび「人の国にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく」（総角）思われ、この大君亡き後、薫中納言もまた「昔ありけむ香の煙につけてだに、今一度見奉るものにもがな」（宿木）と、思い沈む。

「人の国にありけむ香」「昔ありげむ香」は「反魂香」のことである。

漢ノ武帝が李夫人を亡い、思慕の情に耐えず、甘泉殿に夫人の姿絵を描かせ、方士に霊薬を調合せしめ、金炉にて焚いたところ、香煙の中に夫人の姿が現れたという。

王朝人士の愛読書「白氏文集」に

九花帳深夜悄悄　反魂香反夫人魂
夫人之魂在何許　香煙引到焚香處

と詠んでいる。

十洲記ニ云、聚窟洲西海ノ中ニ在リ、由来地上ニ大樹在リ　楓木と相似タリ　華葉アリ　香数百里ニ聞フ　名ヅケテ反魂樹トナス　死屍地ニ在リ　気ヲ聞テ　仍テ活ガヘル（花鳥余情・一条兼良）

薫香のもつ魔力が　幻（幻術士・道士）の心をとらえ、神仙譚となったのである。

歌舞伎の世界では、元禄歌舞伎狂言「傾域浅間獄」「傾域反魂香」など、名香をたいて、亡霊が現れるという趣向を立て、大当りをとったが、源氏の作者は、夢の中で亡き人に会う程度にとどめ、反魂香の伝奇性にのめりこむことは避けている。